

# アメリカと宗教

ピューリタニズムからカルトまで

有賀 弘

## 1 はじめに

アメリカの宗教について乱暴な話ししかできそうにないのですが、タイトルは「アメリカと宗教」としました。それは「アメリカの宗教」というつもりではないという、アメリカの宗教について説明的にやるといよりは、むしろ、もう常識的な問題だと思えますけれども、アメリカの宗教というのは、少なくとも十九世紀までは基本的には全部ヨーロッパ・オリジンのものでして、しかもヨーロッパにおける展開とは非常に異なった展開をして

いるわけで、それを一応整合的に説明することができないだろうかというのが今日の関心の対象です。副題を「ピューリタニズムからカルトまで」としてありますけれども、これは話題の中心はピューリタニズムとリヴァイヴアリズムとファンダメンタリズムとカルト、ただしカルトについてはほとんど触れておりません。たった一言で説明は終わりという形になっています。

これも弁明したいになってしまのですが、アメリカの宗教の問題を考えると概念がみんなあいまいなので。たとえば、ピューリタニズムとは何だというのは人

によってみんな違うくらいに、ピューリタニズムの定義というのははっきりしていないわけです。それから、リヴァイヴアリズムといってもファンダメンタリズムといっても、定義的に限定することは非常に難しいし、ましてやカルトという話になれば、千差万別のカルトがいっぱい存在する。けれども、そういうものをひっくるめて考えてみて、一貫性を持った説明というのが可能なら、それを試みてみたいと考えたわけです。ただし、結果的には一貫性を持った説明にはなっていないと思いますけれども、問題関心はそういうことです。

いずれにしろそういうことを考えていますと、アメリカの宗教というのは、宗教というかたちでヨーロッパ諸国と同じようにくっついてしまうことはできない。むしろ、社会そのものが宗教的性格をもっているのではないかという感じが、だんだんしてくるわけです。それでは、アメリカとは宗教的社会かという話になると、かならずしもそうとも言えない。そもそも宗教的社会という言葉そのものも、どう定義して良いのか困ってしまう。アメリカの場合、宗教性が表立っていることは確かですが、ヨー

ロッパの場合ですと、だんだん内面化が進行して、宗教というのは社会の表面から姿を消すといったらかしいですけれども、たとえば教会としては残っている、そこへ礼拝に行く人たちはいる、けれども宗教が社会の性格規定みたいな役割を果たしている側面はだんだんなくなってきたというふうに思うのですが、アメリカの場合にはその点が違うのではないかという感じがかなりあるわけです。

つぎに、「アメリカ社会の宗教性・非宗教性」ということで考えてみますと、たとえばマックス・ヴェーバーの論文で非常に有名になった、それ以前から有名だったと思いますが、ベンジャミン・フランクリン、自伝を読みなおしてみたのですが非常にもしろいのです。非常に面白いというのはなにかといいますと、彼はマサチューセツのボストンで、まさにニューイングランドのピューリタニズムの真っ只中で生まれるわけです。けれどもそこから抜け出してしまっわけです。ニューヨークへ行ってしまうって、ボストンにいる間もそうですが、ニューヨークへ行っても教会へはほとんど出席しないので

す。教会関係の慈善事業とかには金は出しているのですが、教会にはつまらないといって出席しないのです。それでは非宗教的な人間かあるいは信仰をもっていないのかということになると、敬虔さにおいては、しかも内面的敬虔さというよりは社会的に表現される敬虔さにおいては、他の人から際立つぐらい、とりわけ彼の出身階層から考えれば非常に際立つような敬虔さというのをもっている。教会にはほとんど行かないのですが、リヴァイ・ヴァリズムの論文を読むと、それをサポートするためにかなりの大金をだすというようなことをやっているわけです。そうすると、こういう人の宗教性というのは一体なんなのだろう。考えようによつては、たとえば教会に忠実に通つてというのが敬虔さと宗教性の証明であるとするれば、フランクリンの生活というのは非宗教的生活というふうに考えられざるをえないけれども、にもかかわらず、キリスト教徒の敬虔さという点では、やはりかなり際立っている。そういう意味では、宗教性をもった人間です。マックス・ヴェーバーがああいうかたちで取り上げるのは、理由があると考えていくくらいの宗教性は

もっているというふうに思うのです。

ただ、フランクリンをピューリタンというふうに考えてもいいのかどうか、こうなると本当に困つてしまつて、どうもピューリタンという定義づけをするのは難しいのではないかという気もしますけれども、他方では、やはりピューリタンだと思わざるをえない。それはそれとして、フランクリンというのは、そういう意味では特殊なのかもしれませんけれども、だけど考えてみると、アメリカのかなり一般的な人々の際立つたタイプ、人物だったということではないかという気もするわけです。

マックス・ヴェーバーのついでにもうひとつ問題にしたいのは、彼の見た「世俗化された」宗教性ということです。それは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の問題ではありませんで、『プロ倫』の場合には「世俗化された」という側面についての記述はあまり無いのですけれども、これはセクト論文といわれているアメリカ観察記の問題です。要するにマックス・ヴェーバーの従兄かなにかがアメリカへ移住して耳鼻科を開業するのです。そこへ患者がやってきて、「わたしは

××通りのバプテIST教会の会員です」と言うわけですが、ドイツから行つて開業した従兄は何のことかわからないでいたら、後からアメリカ人の医者が「治療費は確実に支払いますからご安心を」という意味だという説明をしてくれたという話しがセクト論文に出てくるのですけれども、これは宗教は単なる手段ないし飾りであつて、したがつてそういうことを言う人には宗教性はないのかという話しになれば、そうではないと思うのです。やはりある種の宗教性を備えていて、おそらくかなり敬虔なクリスチャンです。その後に洗礼を受ける話が出てきますけれども、バプテISTなので全身洗礼で、やはり洗礼を受けるために全身を水に浸してというのはある種の敬虔な宗教性といわざるをえない。だけど、それが同時に金の支払いは確実ですというような世俗レベルの問題と完全に結びついてしまふ。そういう意味では、考えようによつては宗教がその時々社会にどんな適応して変化していくというふうにも考えられるのかもしれない。けれども、その点もどう解釈していいのかというのはよくわからないということです。

アメリカ社会の宗教性を考える場合に、これも驚くべきことなのですが、十九世紀の前半は統計資料がないのですが、十九世紀後半では教会への所属率は一〇%から二〇%台なのです。いちばん高い年で二二・三%で、一〇%台が多いのです。ところが、二十世紀に入ると急速に上昇するのです。一九〇五年で四二・三%、それから少し上下することはあるのですが、いちばん高くなるのが一九五〇年代で六〇%をこえるのです。教会所属率というふうに表示されているのですが、いったい何が所属ということなのかというのは、これは必ずしもはっきりしませんけれども、いずれにしろ五〇年代から六〇年代は六二・三%ぐらいまで、それから又少し下がりますが、すくなくともほぼ五〇%という線で、総人口の比率です。から子供は除いてあるかとかそういうのはわからないのですが、基本的なトレンドは示していると思うのです。そして、ヨーロッパの常時出席率との比較で考えれば異常に高いのです。

十九世紀は、宗教社会的であつたということは事実だと思ふのです。それが二〇%ぐらいで、二十世紀になつ

てからそれだけ上がっているとすれば、その宗教性というものは全然落ちていない。十九世紀の場合に所属率が低いというのは、これは西部へ展開していくときには教会に登録するという状況ではないわけですから、必然的に低くならざるをえないということなのですが、それが二十世紀になってそういうことが可能になったら、これだけの数字になってしまうというのはたいへんなことだろうと思うのです。そういう意味では、宗教的社会というふうにいえると思うのですが、これはヨーロッパではおよそ考えられないことだとすれば、全部ヨーロッパ・オリジンの宗教であるものが、アメリカにおいてはそういうかたちで社会生活のなかにちゃんと根づいたままで現代にまで残っているというのは一体どういうことなのか、そのところを一貫した説明が可能なのか、そのようなことをちょっと考えてみたいということです。

## 2 ピューリタニズムの変容

一貫した説明といういい方をすれば、当然のことながら、そういうことを考えるためにはやはり歴史にたち戻

って考えてみる以外に手はないわけです。そうすればアメリカ史の常識にたち戻って、ピューリタニズムを精神的中核とした独立自営農民の作り出していく社会というイメージをもう一度問題にしてみざるをえないということとで、ピューリタニズムというのはいったい何だったのかという問題から始めたいと考えます。

ところで、さっきも申し上げましたように、ピューリタニズムというのは本当にわからないのです。たとえば、フランクリンはピューリタンといえるのです。ピューリタンのな心情倫理が意味をもっていたわけでしょう。そうであるとしたら、それもピューリタンだというふうにとらえる人たちというのはいくらでもあるわけです。だけれど、教会へおよそ出席しないような分離派ピューリタシなどというのは、考えようによってはナンセンスなのです。そういう意味では、アメリカに適用されるピューリタニズムという言葉というのはよくわからないのです。人によっては長老派まで、教会を純化 (purity) しようとした人たちがピューリタンであって、だからセパライストはピューリタンではないと考える人も結構い

るわけです。けれど、セパライストはピューリタンでないと考えるとすると、アメリカの場合には、たとえば最初にプリマスへ行った聖徒たちというのは、基本的にはブラウニストです。そして、ブラウン派の人たちは完全にセパライストです。

ブラウンというのは変な人で、みんなを分離させておいて自分を中心に「聖徒の共同体」としての教会を作ったのですが、自分はさっさと再転向して国教会の牧師に戻ってしまうのですが、Congregationalismの父と呼ばれるように、会衆派的な方向というのはブラウンによって提出された方向ということができますし、そういう意味ではプリマス植民地というのは、ある定義によればピューリタンと関係ないのです。教会の純化という発想とは全然違って、「聖徒の共同体」を作っていくという発想の人たちであるわけです。だから、「広義の」というふうなことわざをええないのですけれども、何しろそういうものがピューリタニズムと呼ばれ、そしてそのピューリタニズムを精神的中核とした独立自営農民による社会建設というのが、アメリカ史の原点みたいに

いわれるわけです。そして、その文脈上では、プリマス植民地の建設ということが、またビルグリム・ファーズというものが非常に重要視されるということになるわけです。

ところで、「メイフラワー誓約」(Mayflower Compact) というのは、教会形成のための誓約 (Covenant) とは全然違うのです。一応ピューリタンといっておきますが、ピューリタンでない人たちがメイフラワー号にはたくさん乗っていて、そういう人たちを取り込んだかたちで植民地を運営していく、そういう意味では、植民地に政治的に統合していくことが上陸に先立った大問題なのでしようが、事実船の上でいろいろなことがあったのです。ピューリタンのほうが、女・子供連れで年を取っていて労働力としては駄目で、だからピューリタンでない人たちは、あんなものは放り出して自分たちだけでやろうというほうが、よほど植民地開拓には良いという意見が強くなるわけです。上陸して一冬越したら半分くらい死んでいたわけですからたいへん厳しい状況で、そこで放り出されたらピューリタンたちは全滅して、彼らだけが生

き残るということになりかねない状況だったわけです。

だから、いわば政治的社會を構成するために、教会契約ではなくて世俗的契約を結ぶというかたちでメイフラワー・コンパクト、言葉も違うわけです。教会契約はコヴァナントです。コンパクトのほうは世俗的契約なのです。そういう色彩が強いのです。メイフラワー・コンパクトによって形成された共同体というのは、基本的には政治的な目的を持っていた。あるいは、政治的統合を目的として、宗教というのは副次的な要素に拡散されてしまっただけでなく、宗教の側面でも取り込んでいくような体制をつくろうと、一生懸命努力するわけです。プリマスの場合にも、そういう努力はコングレゲーショナルリズムにもとづく一種の公定教会制として行なわれるわけですから、そう簡単にできるわけではないわけで、先

き残るということになりかねない状況だったわけです。だから、いわば政治的社會を構成するために、教会契約ではなくて世俗的契約を結ぶというかたちでメイフラワー・コンパクト、言葉も違うわけです。教会契約はコヴァナントです。コンパクトのほうは世俗的契約なのです。そういう色彩が強いのです。メイフラワー・コンパクトによって形成された共同体というのは、基本的には政治的な目的を持っていた。あるいは、政治的統合を目的として、宗教というのは副次的な要素に拡散されてしまっただけでなく、宗教の側面でも取り込んでいくような体制をつくろうと、一生懸命努力するわけです。プリマスの場合にも、そういう努力はコングレゲーショナルリズムにもとづく一種の公定教会制として行なわれるわけですから、そう簡単にできるわけではないわけで、先

ほど申し上げたようにむしろ現実の力としては非ピューリタンのほうがはるかに力を持っていたとすれば、いくら努力しても公定教会制を貫徹するということはできない。したがって、わりあい簡単にプリマス植民地というのは崩壊して、マサチューセッツ湾植民地に併合されるということになるわけです。

しかし、この過程はプリマス植民地をアメリカ史の原型としているといえると思います。原型という言葉は斎藤眞先生が割合こだわって使っていたらっしゃる言葉なのですが、ピューリタンだったから原型なのではなくて、ピューリタンを中心にしていたかもしれないけれども、まさに政治的な、あるいは統合の問題を頭において植民地を形成していかざるをえないという意味で、その後のいろいろなレベルでのアメリカの宗教と政治の関わり合いについての原型としての意味を持つのではないかと思います。そういう観点から他の植民地を見てみますと、それぞれにそういう側面がつよく見えてくるのではないかと思います。

プリマスの次に問題になるのはマサチューセッツ湾植民

地とそこにおける公定教会制かと思いますが、この問題については前に佐々木さんがご報告くださったのでいろいろ申し上げることはなにもないかと思えます。簡単にいえば、神権政治的な体制といえるものをつくろうとしてそれがあまりうまくいかないで、それを一種の国教会制としての公定教会制へと切り替えていくとするのがマサチューセッツの例ではないか。ですけど、その原点になるのはピューリタニズムですね。ジュネーブにおけるカルヴァンのような、一種の神権政治の体制というのは矛盾は含まないと思います。だけど、どんなに広義に使ってもピューリタンというのは、それぞれの信仰における一致を前提に集まっていた、そこに教会を形成するという、教会内ピューリタンの場合もそういう側面が非常に強いと思いますけれども、教会をつくらないとしても集団をつくる。集団形成の原理はそういうもので、セバティストの場合は完全にそうです。それは、アメリカにわたった人たちの間にはつきり見られる傾向でいえば、「聖徒の共同体」としての教会をつくるという傾向、それがピューリタン一般の傾向というふう

考えられるとすれば、神権政治もやるわけですが公定教会制というかたちで一応制度的定着がはかれるとすれば、それは本来の自分たちの信仰としてのピューリタニズムと矛盾せざるをえないわけです。

具体的には、タウンの共同体を前提にして、タウンの運営に携わる公民と訳されたり市民と訳されたりしますが、けれども、タウン自治でタウンの公民権をマサチューセッツの公定教会制を支えている信仰の担い手に限定するということかたちで、公定教会制的な方向というのは取られていくわけですけれども、これは移民がある程度流入してくればすぐに崩壊せざるをえないわけです。新しく入ってきた人をそういう共同体に取り込んでいくような、そういうエネルギーを生み出せるようなものでは全然ないわけです。それはピューリタニズムと国教会制の矛盾というものがそういうところで露呈してしまうということだろうと思いますけれども、結局は、わりあい早い時期から実質的には寛容政策を取らざるをえないということになっていったのだと思います。

ペンシルヴェニアとロードアイランドというのは、変

ない方を見るとマサチュセッツからはみ出した部分で、ご存じのとおり、ペンシルヴェニアはウイリアム・ペンがクエイカーの社会をつくるのですが、そこへはいろいろな要素が流れこむわけです。そもそもクエイカーというのは、マサチュセッツからはみだして、そういうのみだしの要素が集まっているわけです。だから宗教についていえば、はじめから寛容政策です。寛容政策の下で、植民地としてははじめから政治的に統合をはかるということが前提です。

これは現地にいつてみてびっくりしたのですが、再洗礼派のメノナイトがランカスターの、フィラデルフィアからだいぶ内陸に入ったところに最初の根拠地を築いて、アーミッシュというのはそこから分かれたわけです。アーミッシュというのは、メノナイトに対するファンダメンタリストという立場を占めると思いますけれども、メノナイトが来たのは、実はウイリアム・ペンが手紙を書いて「そんなにヨーロッパで苦勞しているのなら、土地の余裕はあるからこっちへ来たらどうだ」。その点、ウイリアム・ペン自身はかなり真摯なクエイカーだと思

実は教義の差異も小さくなっていくということです。教義の差異というのをどういうふうに見るかは問題ですが、それでも、要するに「俺のところはこうなんだ」としがみついているから差異は大きいように見えるわけで、実際の差異というのはそんなにないわけです。たとえばピュリタン諸派についてみれば、少なくとも分離派というのは、ブラウニズムの場合は完全にそうだと思いますけれども、いったん分離をはじめたら無限の分離の可能性を持っています。それは小さな差異でみんな分離していく可能性を持っているわけです。そういう小さな差異で分離していったのが共存という話になってくれば、気がついてみれば差は大きくなかったではないかという意味で、実質的にも差異は減少してしまうという側面を持っています。だけど、そうなりますと宗派の存在理由がなくなりますから、実質的には差異は減少したとしても、違うんだということは主張される。しかし、あまり実質的な意味をもたないようなかたちで差異は主張されるという状態が、まさに最初から寛容政策をとることによってペンシルヴェニアとロードアイランドでは実現し

いますけれども、クエイカーだけという閉鎖的な視座に閉じこもっているわけでは全然ないですね、そのことが証明しているのは。そういう意味では、はじめから寛容政策になっているわけです。

ロードアイランドについても同じです。これは、ロジャヤー・ウイリアムズが中心になって植民地がつくられたのですが、ロジャヤー・ウイリアムズというのはマサチュセッツの異端者で、マサチュセッツを追われてわりあい放浪するのですが、プロヴィデンスに本拠地をつくります。これも最初から宗教的寛容が前提でことは進行するわけです。ペンシルヴェニアとロードアイランドというのは、将来においてプリマスやマサチュセッツで起こるであろうことを先取りしたようなかたちで、植民地建設が行なわれるということになったわけです。

ですけれど、はじめから寛容が前提だということになれば、少なくともそういう世界においては、宗派間の教義的な差異というのは、あるいは差異が持っている意味というのは相対的に小さくなってしまふ、ならざるをえないわけです。意味が小さくなっていくということは、

ていったのではないかというふうに思います。最初から寛容政策ですから、どんどんますます異質な要素が流入してくるのです。そして、流入してくる中で、実質的な異質性というのはどんどん縮小してしまふということではないかと思ひます。

さらに、十八世紀のこのような状況は、十九世紀のデノミネーションナリズムの原型をなしたのではないかと思います。デノミネーションナリズムという概念は、これまたかなりあいまいで、あまりいい概念という気がしないのですが、その概念が適用される状況というのは、おそらく十九世紀の中葉以降ぐらいから、アメリカにいろんな宗派がいっぱいあり、それが併存状態でそれぞれに違いを主張しながら、実質的な違いはあまりない。そういう状況に巻き込まれて、たとえばカトリックもひとつのデノミネーションになってしまふし、ユダヤ教さえもひとつのデノミネーションになってしまふということ、これは宗教統計の本を見ますと、しばしばカトリックもユダヤ教もプロテスタント諸派と一緒に並べられているのです。バプティスト以下の諸宗派と一緒に並べられて

いるというような状況が出てくるのですが、そういう状態が生まれてくる原型的な状況というものが、ペンシルヴェニアとロードアイランドにはあつたのではないかということです。

### 3 諸宗派のアメリカ化

十八世紀の中ごろまでの状況で考えれば、以上の三つのタイプというのはそれぞれに原型性をもっているといふふうに考えられますが、それと並べてもう少し宗派の問題を考えるとすれば、最初のイギリス植民地ヴァージニアはイギリス国教会を持ち込んだわけですから、それでイギリス国教会の忠実な制度化をはかうとしたわけで、教区制、そして大問題なのですが、教会税——十分の一税ですが、十分の一税というのは収入の十分の一で相当な重税だと思えます——いずれにしろ教区制度を整備して教会税を徴収して、その基礎のうえに国教会をなるべくイギリス国王との関係のなかに閉じこめようとするのです。

けれども、国王は海の彼方のわけです。そういう意味

では国王不在なのです。ですから、首長不在の国教会という変なかたちのものにならざるをえないわけですから、国教会が建前で教区制をひいてということになると、ヴァージニアがまずとるのは不寛容政策です。要するに、国教会の不寛容という形で宗教的要求を抑さえ付けようとする方策だと思えます。しかし、国王不在の国教会という体制がとられていることによって、政治的な要求というのは割合ストリートに教会の問題として表に出てしまいうわけですから、さらに、下層のところからの政治的な要求というのは、聖職者などとは無関係に飛び出してくるということになってくるのだと思うのです。だから、国教会は政治的統合のための道具としての役割を果たしえなくなる。

したがって、たとえば独立ないし革命が具体的な日程に上がるようになると、国教会ではもたないということになるわけですから。ヴァージニアは、独立革命のリーダーたちをたくさん生み出しているのですけれども、彼らにとっても国教会というのは矛盾として写らざるをえなくなってくるわけですから。十八世紀もかなり進んでからですけ

れども、厳然とした国教会制度をとっていたのが、独立の気運が増大する中で、寛容というよりは宗教的自由、宗教の自由の要求が強く出されるようになり、他の諸植民地にさきがけて、「ヴァージニア宗教自由法」というかたちでの、宗教の自由を保障する法制度が真っ先につくられるという、国教会制をとっていたがゆえにかえってそういうことになってしまうといふうにいえるかもしれないと思えます。

それからもうひとつ、さつきカトリックのことをちょっと申し上げましたけれども、宗派とっていいのかどうか知りませんが、カトリックというのはどうなったのかということも問題にならざるをえない。メアリーランドというのは最初からカトリックです。ポルティモア卿に後押しされたカトリックがメアリーランドに導入されるわけですが、これは最初から少数派でして、イギリス本国でもこの時期になれば少数派なのです。だから、いわば差別を受けているほうの少数派が小さな根拠地をアメリカに求めてということをやってきたわけですが、ここではペンシルヴェニアやロードアイラ

ンドと同じようにはじめから宗教的には寛容政策がとれたのです。

そういう意味ではカトリックはあまり大きな意味をもたないままいるわけですが、そこへ十九世紀になってアイルランドからの移民が、これは必ずしもメアリーランドへという意味ではありませんが、大量に流入してくるという事態になるわけですから。その時に初めて、カトリックの問題というのは具体的な問題になるといえると思えます。十九世紀前半、アイルランドではずっと飢饉が続き、一〇〇万人近い人々が移民として流出したのではないかと推測されていますが、その圧倒的部分はアメリカへ行ったわけですから。そしてアイルランドは、現在まで尾を引いているように、基本的にはカトリックの支配的な地域です。とくに飢饉にさらされる人たちというのは、元々のアイルランドの住人でイングランドから行った人たちではないわけですから、土着に近いカトリックをそのまま持ち込むということになるわけですから。ですから、アメリカ社会では相対的な少数派などという段階にはとどまらないわけで、周辺は圧倒的にプロテ

スタントの中へ、一握りのカトリック教徒というかたちで、アメリカ社会に入っていくわけです。

もともとアイルランドにいた時からそうだと思いますけれども、彼らは敬虔なカトリック教徒ですが、ローマ教会との関係というのはある程度希薄なのです。イングランドとの関係もあって、彼らはローマから相対的な独立性を保っているわけですが、それが大西洋を渡ってきた、そういうカトリック教会。たとえば南米のカトリック教会に対してはローマは非常に直接的に布教しているのですが、アイルランドのカトリックというのは、古代ローマ帝国にイングランドが所属していた頃からカトリック化されているわけで、そういう意味では近代になってローマ教会が直接手を下したような対象ではないわけで、相対的に離れた関係にあったわけです。

それは聖職叙任の問題についても影響を及ぼしています。ローマはちゃんと面倒をみてくれないし、ローマの面倒はみてももらいたくないアイルランドのカトリックということになると、聖職者が絶対的に不足してしまうのです。カトリックの場合に聖職者がいないというこ

とはなはだ困ることだろうと思いますが、極端に不足してしまうのです。その結果、高位の聖職者までが選挙によって選ばれるという制度が、アメリカでは十九世紀の割合早い時期に定着してしまうわけです。もちろん、聖職者選任の問題は現代では異なると思いますが、当時のカトリックというのはアメリカ流のひとつの宗派、そういう意味ではカトリックは完全にアメリカ化してしまっただけだと思います。

イギリス国教会についても、ヴァジニア宗教自由法みたいな、イギリス本土における寛容令の問題とは全然違うような観点がだされてくるということは、アメリカ化したということだろうと思いますし、ほとんど同じような問題はユダヤ教についてもいえるのではないかと。要するに、諸宗派の中ではバプテイスต์がいちばん多数派なのですが、バプテイスต์からユダヤ教まで含めて、諸宗派はすべてアメリカ的な宗教になっていったのではないかと。そういうアメリカ化、その結果がデノミネーションナリズムだと思えますが、そのデノミネーションナリズムへの方向を宗教的に支えていたのはリヴァイヴァリズムと

いうふうに思います。

#### 4 リヴァイヴァリズムとデノミネーションナリズム

このリヴァイヴァリズムというのも広義です。頭に浮かんでいるのは大覚醒といわれるものでジョナサン・エドワーズがいちばん有名ですが、現代のビリー・グラハムになれば信仰の内容などはほとんど無関係なのです。

戦後のわりあい早い時期のビリー・グラハムの伝道集会を聞きにいったことがあります。要するに「回心したと言え」というだけの話なのです。それを鳴り物入りでやって、まわりでみんな自分は回心したという感じで、それにつられてわーっと回心熱が起こってしまうのです。そういうのをみんな取り込んでしまう。ビリー・グラハムというのは、もともとはバプテイスต์系ですけれどもどの宗派へ行ってもいいんですね。そこで回心したという人たちを、たとえば住んでいるところの便利さとかそういう種類のことで、いろんな宗派の教会に適当に分け与えてしまうのです。そういう意味では、極限化し

たデノミネーションナリズムの状況というふうにいえると思いますが、それでも、ビリー・グラハムは非常に極端で、それをジョナサン・エドワーズと比較したら、これはほんでもない話しだと思っています。エドワーズの大覚醒運動の主要な関心は、「聖徒の共同体」の再興。アメリカへ渡ってきたときの、これもアメリカ的ピューリタニズムだと思いますけれども、ピューリタニズムの精神の再興というのが、エドワーズのめざしたところだといえます。アメリカ・ピューリタニズムの原点に戻っての聖徒の共同体の再興というのをめざすのでしょうか、それは結果的には非常に政治的な効果を生むのだと思います。

「聖徒の共同体」をアメリカに再興するということは、それを政治に読みかえれば、結局はイギリスから独立した共同体の形成であり、革命であるという、そういう連関を本当はちゃんと文獻的に証明しなければいけないと思います。明らかにそういう関連をもったかたちで独立や革命の意識を鼓吹する結果になっている。そういう意味では、初期のリヴァイヴァリズムというのも政治的、要因が優位しているといっていると思います。だから、

そういう側面のうえでリヴァイヴァリズムというのはずっと展開することになるわけで、十九世紀のリヴァイヴァリズムも、これはフイネイとかそういうところから始まって十九世紀末までをいちおう思い浮べているわけですが、これをみますとさきほどの大覚醒が世俗化して、世俗といっているのかあるいは内面性の欠如といっているのか、その辺が困ってしまうのですが、その路線のうえでついにビリー・グラハムにいたるような方向ですと展開していくわけです。

フイネイというのはたしかオバリンの総長になるのですが、オバリンというのは神学大学としてもととつくられたところです。その総長になるということですから、グラハムのような話しではおよそないのですが、エドワーズから比べればそういう方向へかなりむかつていくし、その後の人たちというのはどんどんそういう傾向をたどっていく。それはユニテリアン、あるいはアルミニウス派、いつてしまえば自由意思論が深く浸透していく、教義的に考えればそういう問題だと思います。

マックス・ヴェーバーがあの『プロテスタンティズム

バプティストおよびメソジストは、バプティストがいちばん中心ですけれども、そういう宗教を前提にして黒人層に急速に浸透していくわけです。それでアメリカ最大の宗派、バプティストはとび抜けて大きいのですが、そういう宗派を形成していくことになるわけです。これは、極端な言い方をすれば現状生活の全面的肯定で、それがもっている作用というのは、黒人層の場合で考えれば、かなり保守的な機能といえると思いますが、そういうかたちで浸透していくわけです。

リヴァイヴァリズムに戻れば、それは宗派を超えた大集会になるし、そういう宗派を超えた大集会をベースに、自由意思論を基礎にしたような各宗派が社会の下層に急速に浸透していく、それが十九世紀のリヴァイヴァリズムの特徴ではないかというふうに思います。それは、デノミネーションナリズムの問題として一応コメントを加えるとすれば、宗派を超えた信仰心、宗派と信仰心との直接的な関連性というのはほとんど消えてしまって、ただリヴァイヴァリズムによって信仰心を高揚させて、それをベースに各宗派というのは平和的共存というのも適当

の倫理と資本主義の精神』を書いたとき、やはり中心的なテーマのひとつはカルヴァンの予定説であるわけで、この予定説というのは自由意思の完全否定ですね。これは、エラスムスとルターの論争でもお分りのとおりで、自由意思論の完全否定、そこをヴェーバーは重視しているのですけれども、カルヴァン派的なピューリタニズムのなかにも、その自由意思論が圧倒的に浸透してくる。

それは別の言い方をすれば、日常生活における理性、理性的判断、そういう意味では政治的といいますか日常生活的といいますか、社会的といってもいいかも知れませんが、そういうものが圧倒的に優位した信仰というもの。だから「回心」というような場合にも、それは回心したということを中心とした回心なので、内面での宗教的体験の問題ではなくてなってしまうわけです。パウロにおける、あるいはルターにおけるというようなかたちで問題になるような回心の問題では全然なくなってしまう。初期のピューリタンの場合にはその問題は大きかったはずですが、それでも、全然違ってしまうということになります。

な言葉かどうかわかりませんが、各宗派それぞれに栄えていく。

信仰心あつき社会においては、信仰はまさに社会的なものをベースに成り立っているから社会に浸透しやすい。そこにでき上がってくる社会において、少なくとも表面的にはますます信仰心・宗教性が強調されるのであり、そうした中で各宗派の平和的共存が成り立っていくという状況、これが十九世紀末までに達成されたアメリカ社会の基本的なトレンドではないだろうかと思えます。それはもうちょっと別な言い方をすれば、宗教というのはアメリカにおいては異常に政治的、括弧つきですが、政治的役割を強く担わざるをえなかった。何しろインディアンを除けば無人の荒野に国をつくっていくわけですから、どうしてもポリティカルな性格の宗教が必要とされた。

しかし、南北戦争も終わって、政治的な枠組みが確固としたものになってくると並行して、宗教は社会道徳的な、あるいは倫理的な側面ばかりが強調されるものへと転換していくのであり、その延長線上に海外伝道への

情熱もある。アメリカ社会はそういう意味での宗教的社会になつてしまつた。そして、比喩的にいえば、フロンティアの消滅は、政治的には太平洋の彼方へ向かつての進出を、また宗教的には、これも主として太平洋の彼方に向かつての海外伝道を生み出した。十九世紀の後半からだんだん海外伝道の情熱が高まつてくるのですが、アメリカ社会に内在すれば、そういうことも関係をもっているのではないかということです。

社会道徳的な倫理的な宗教というのは、社会の上層の人びとにとつてみれば、教会に出席することだけでは満足できないで、より積極的に教会活動に参加していかうとする情熱を生む。そうすると教会は俗人化するわけです。そうした方向での代表的な運動は社会的福音(ソーシャル・ゴスペル)だろうと思いますが、要するに大衆を道徳的・倫理的に鍛えていかうとする。そのためにもまず必要なのは健全な生活を支えてやることで、一種の福祉的な活動が教会活動の中心になる。あるいはクリスチャン・サイエンスのような方向。そのいきつくところは禁酒法です。禁酒法が成立する近代社会というのは、

イスラム社会は別にして、なんと表現していいのかわからないのですが、道徳的社会・倫理的的社会という以外に手はないのかなと思うのですけれども、そういう方向というのが教会内で、とりわけ豊かな階層のなかではそれがどんどん進行していく。そういう活動をするることによつて、いわば自己満足していくという傾向があると思うのです。

これはソーシャル・ダーヴィニズムの問題も大きいと思いますが、貧困な労働者大衆への対応がほとんど社会主義には転換していきかないのですね。一部は社会主義にいきますけれども、そうではなくて社会的福音のようなそういう方向へといふふうになつていく。そういうかたちで社会の宗教性というのは維持されていくということかと思うのです。ただし、教会が社会福祉活動の中心的担い手となることはない、その点はヨーロッパとの大きな相違だろうと思います。これは二十世紀もかなり進んでのからの問題かもしれませんが、ヨーロッパの、国教会制的側面が強かつた社会においては、福祉国家化の中心的な担い手のひとつは教会なのです。しかしアメリカの

場合には、そういう意味では教会が社会福祉活動の中心的な担い手になることはないのです。教会というのは、国教会制的なものが強かつたところでは、いわばパブリックな行為として社会福祉活動が行なわれているとすれば、アメリカの場合には基本的にプライベートな、したがつて社会福祉といふふうにはおそらく言葉を使えないような慈善活動的側面が、禁酒法を成立させるのも一種の慈善活動なのですね、そういう側面が強いということになるのではないかと思います。

いままで申し上げたような性格——デノミネーションリズム的な社会、そういう意味で宗教性の非常に強い社会というのがアメリカ社会であるとすれば、その社会にファンダメンタリズムが(ファンダメンタリズムというのも困つてしまふのですが、何がファンダメンタリズムか定義のしようがないのですが)出てくる。たとえば、典型的にはモルモンだとかもの塔とかを考えるとすれば、そういう集団が、要するに宗教的共同体を、しかも大きな規模で実現していかうとする。共同体、あるいは社会を形成する契機としては宗教の意味はほとんど失われてしま

つて、ただ社会全体には宗教性があふれているようなアメリカ社会のなかで、宗教的共同体を形成していかうとするファンダメンタリズム的な傾向というのが起こつてくるのは、ある意味では当然のことではないのでしょうか。

だけど、これが多数派になることは絶対にありえないわけです。ある程度の勢力にとどまらざるをえないのですけれども、それは別の側面からみますと、デノミネーションリズムの展開、そしてそういうかたちでの宗教的社会としてのアメリカ社会の宗教的性格が強まつていくということとは、宗教の問題とか信仰の問題としてみると、信仰の内面化という契機、これは大陸の場合だと十七世紀の末から十八世紀になれば非常に大きな問題になる、そのことによつてヨーロッパ社会の宗教的性格はだんだん弱まつてくるのだと思いますけれども、そういう内面化の契機というのは、アメリカにはほとんど登場しない。そのこととファンダメンタリズムというのは、相互連関の中にあるといえるでしょう。

もうひとつアメリカで登場しないのは、神秘主義だろ

うと思います。今まで申し上げたようなことであるとするれば、神秘主義が登場する契機というのではないわけです。カルトというのは、ある意味では、そういう神秘主義的な傾向の欠如していることに対するリアクションという側面もあるのかなという気もしますけれども、証明のしようはないのです。ただ、総括的にカルトというものを考えることはできませんですけれども、それをあえて一言でくくってしまえば、カルトというのは、大衆社会化状況の下でアメリカ植民地の初期の形成段階で問題になったような「聖徒の共同体」を作り出していかうとすること、というふうに一言でまとめてしまってもそれほど不当ではないかもしれないというふうに考えています。

(あるが ひろし・東京大学名誉教授)